

今週のメニュー

■トピックス

◇PVC News No.110号を発行

塩化ビニル環境対策協議会

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(45) 賀茂別雷神社(2)

木下 清隆

■トピックス

◇PVC News No.110号を発行

塩化ビニル環境対策協議会

塩化ビニル環境対策協議会(JPEC)は、9月10日に [PVC News No.110号](#) を発行しました。今回のトップニュースは、電線愛好家として知られている女優の石山蓮華さんのインタビュー記事で、電線の魅力を話していただきました。特集は、「健康と塩ビ製品」をテーマとして4社取材しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策をはじめとする医療や健康維持に寄与している塩ビ製品、福祉・介護で活用が期待される新しい製品について、開発の経緯や製品の特長などを紹介しています。

まず「インタビュー」では、石山蓮華さんが電線に興味をもったきっかけと電線の魅力について紹介しています。子供のころから街中や路地でたくさんの電線が張られている景色や配線の仕方に面白さを感じてから、その光景を写真に収めるようになり、眺めるだけでなく実際に塩ビ電線被覆に触っても手触り感がよく興味がわいてくると、目を輝かせて話していただきました。また、VECから紹介した身の回りにある塩ビ製品にも手に取って触りながら大変興味を持っていただきました。これからも電線写真の発表はもちろん、本業でのご活躍を期待しています。

特集の一つ目は、様々な膜構造物を手掛けている太陽工業(株)取材して「医療用陰圧テント」について紹介しています。同社の膜加工技術を活かして感染症対策のために開発された製品で、国内外で多くの実績を挙げています。ウイルス拡散防止能力に優れ、軽量でコンパクトな設計が特長です。今後、医療の逼迫が懸念されるコロナ禍の中で、その役割に大きな期待が集まっています。

二つ目は、軟質塩ビシートなどプラスチック製品のメーカーであるオカモト(株)の抗菌性能フィルム「セレブイジェーネ」について紹介しています。抗菌 SIAA マーク^{*1} を取得し、防カビ効果も併せ持っていることが特徴で、かつ欧州の RoHS2 規制にも対応したフィル



ム製品です。この8月に発売されたばかりで、すでにお問い合わせが多くきていることから、今後の展開が期待されます。

三つ目は、塩ビ加工製品を手掛けている(株)三洋が医療機関と連携して開発した車いす用フットレストカバー「べんけいガード」※2について紹介しています。車いすで外傷事故が起きた際に「弁慶の泣き所」である向こうずねをしっかりと守るための保護具として、徹底して柔らかさに拘り肌にやさしい滑らかさを実現するため追求した、ものづくりの工夫と苦勞が窺われます。

四つ目は、PVC ゲル人工筋肉を用いた腰サポートウェアを開発している AssistMotion(株)を5年ぶりに取材し、実用化の進展状況を紹介しています。2019年に初号機が試作され※3、2020年にその改良型1号機が完成したばかりです。2021年発売を目指して、低電圧化や量産体制の整備などの課題に取り組まれています。

次に、「インフォメーション」の一つ目は、ビニル床材メーカーである東リ(株)が2018年に発売した単層ビニル床シート「ヒトエ」※2について紹介しています。表面から裏面まで全面単層シートで、内部にPVCチップを採用して独特な材質感や深みのあるデザインに工夫のあとが窺われます。耐摩耗性やメンテナンス性にも優れた特長があり、耐久性が必要な用途等で普及が期待されます。

二つ目は、塩ビフィルムを用いて手帳の表紙やブックカバーなど加飾製品を手掛けている大比良工業(株)を取材し、同社が有する多様な加飾技術について紹介しています。素材に型押ししてエンボスを施したり、箔を施したりする表面加工法や、高周波を利用した溶着技術を駆使して、塩ビフィルムの表面に美しい装飾を施す技術が加飾と言われています。原反の切断から、箔押、溶断、溶着、表面加工、製品加工まで一貫生産体制をしているのが同社ならではの強みと言えます。

最後に、「広報だより」では、飛沫感染防止用に活用されている塩ビ製フェイスシールドについて紹介しています。医療・介護施設などにおいて広く利用されることにより感染の不安が少しでも取り除かれることを期待しています。

※1 抗菌製品技術協議会(SIAA)が制定したシンボルマークで、抗菌、防カビ、及び抗ウイルスの加工製品として品質・安全基準に適合した製品であることを認定している。

※2 PVCアワード2019応募作品

※3 PVCアワード2019応募作品(審査員賞受賞)

PVCニュースのご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(45)

木下 清隆

かもわけいかづちじんじや
【賀茂別雷神社(2)】

<前回とのつながり>

前回、「賀茂別雷神」即ち「上賀茂神社」の祭神は、「賀茂神の御子」と想定されることを示したが、では賀茂神とは一体どのような神なのかが、次なる疑問として出て来た。しかも、天皇家が守護神として祀るほどの神なのである。今回はその謎解きである。

その疑問を解くために、この賀茂神社の創建の経緯を見てみよう。これについては『山城国風土記』逸文の冒頭の文が参考になるが、その内容を要約すると、

「天孫に従って日向の高千穂の峰に降った賀茂
たけつぬみのみこと
建角身命は、神武東征に従い、これを先導して大和の
かづらき
葛城の賀茂に到りそこに住んだ。その後、南山城の岡田の賀茂に到り、更に
かどの
葛野河と賀茂河の合流する石川の瀬見に至った。更に、

その川を上り久我の国の北の山基に定住し、そこを賀茂と名付けた。」

となる。この文の後に、初めに紹介した「丹塗矢神婚伝承」の話が続く。この一連の内容を要約すると、

- ① 賀茂氏の祖と見られる賀茂建角身命は、神武東征に参加して皇軍を先導し、大和の地に到った。
- ② その後、大和の葛城に一時居住していた。
- ③ 更に、南山城の岡田（現木津市北西）に移り、また、賀茂川上流の地に移った。
- ④ この地に彼等は賀茂神、若しくは後世になって賀茂別雷神と称せられるようになる神を祀るようになった。

といったものである。この賀茂氏の移動については、否定的な見解もあるが、大和岩雄氏は『神社と古代王権祭祀』（白水社、一九八九）で、これを史実と見て肯定している。氏は積極的にそのルートの後付けをし、賀茂氏の山城移住の動機を次のように推測している。

「葛城 襲津彦を祖とする葛城氏が天皇に匹敵する権力を持っていたことは、井上光貞、直木孝次郎が指摘するところだが、記・紀によれば、葛城氏は雄略天皇によって滅亡した。葛城の賀茂氏・秦氏は葛城臣滅亡後の雄略王権強化のため、政治的使命をもって移住させられたのであろう。そうでなければ、山城における最初の移住地が、交通の要衝の岡田であった理由がうまく説明できない。たぶんそれは、南山城の葛城臣の権益を王権の支配下に置くための移住であったと考えられる。」（一五〇頁）

このように大和氏は、賀茂氏移住の理由が政治的なものであったとしている。この所説の中の葛城氏は、奈良盆地の南西に大きな勢力を有していた古代の豪族で、ここから多くの



上賀茂神社

后妃が出ているが、雄略朝の時期にこの葛城氏の有力な系統が滅ぼされたとされている。賀茂氏はこの葛城氏の本貫である葛城の地、若しくはその周縁の地に居住としていたとみられており、この一帯に賀茂氏系の神社が幾つも残されている。その後、賀茂氏が山城へ移動してからは、その地で渡来人系の秦氏と極めて緊密な関係を持つようになったと考えられている。秦氏は応神朝の時期に我国に帰化したとされているが、彼等には大和・山城等に居住地が与えられており、山城では現在の京都の西半が彼等の勢力圏であった。

山城の賀茂氏は、土着か移住勢力かについては論議のあるところであるが、ここでは移住勢力であり、その時期は雄略朝としておきたい。この賀茂氏は、秦氏との関係あるいは別の何かの理由で、山城地方の大きな勢力となったようである。

以上で賀茂神社の創建の経緯はある程度明らかになったが、この神社にまつわる謎は何も明らかになっていないし、寧ろ増えてきたといえよう。そこで改めてその謎を整理してみると以下ようになる。

- ① 賀茂別雷神は、奈良時代は朝廷から否定的に見られていたものが、なぜその後、天皇家の守護神となったのか。
- ② 賀茂別雷神とはどのような神で、素戔嗚尊とはどのような関係があるのか。
- ③ 賀茂氏は神武東征に参加したとあるのは本当か。賀茂氏と神武天皇とはどのような関係があるのか。

等である。そこでこの謎を解くために、素戔嗚尊をも少し調べてみることにする。最初の問いは、素戔嗚尊の本拠地はどこか、である。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp